

---

# 嫌いな俺と大好きな彼女

卵かけご飯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嫌いな俺と大好きな彼女

### 【Nコード】

N5128M

### 【作者名】

卵かけご飯

### 【あらすじ】

いつまでも一緒にだと誓い合ったグループがあった  
全員がお互いを大切にしていた

誰かが馬鹿をやって、誰かがそれを笑う

誰かが傷つけばそれを助け、害をなしたものを全力で排除する

何があっても切れぬ絆がそこには存在した

たとえ大人が相手でも、たとえ軍隊が相手でも、たとえ・・・世界が相手でも彼ら彼女らは恐れない、すべてを敵に回しても・・・大切なのは仲間という

そんな少年少女の物語

## 変人の宝庫（前書き）

二番目の作品になります。

## 変人の宝庫

「あ！ あのね！ 私………」

少女は必死に何かを目の前の少年に伝えようとしている  
少年の方も少女が何かを伝えようとしているのはわかったので、  
少女がそれを言えるまではなにも言わない

「私ね！ …… のことが好き！ …… なの」

「ぼくのことか？ 本当？」

ストレートな少女の言葉に少年は戸惑いを感じる。

「本当よ！ 本当に好きなの……でも、私……心配  
なの」

「なにが心配なの？」

「 が私以外の人を好きになっちゃうんじゃないか？って そう  
思うと、胸が張り裂けそうなの」

少女はその純粋な気持ちを打ち明ける。 幼いながらも恋をした少  
女の精一杯の告白

「そんなことないよ！ ぼくも が好きなんだから！」

「本当！？ 本当に？ 嘘はいやよ」

「嘘なんかじゃない！ ぼくは が好きなんだ」

少年は少女を心配させまいと自身の気持ちも打ち明ける  
それは幼いながらも微笑ましい光景だ

「うれしい……じゃあ約束して？ 私が大人になったらお  
嫁さんにするって」

「いいよ！ 約束する。 ぼくが大きくなったら のことをお嫁  
さんにしてあげる！」

「約束よ？ 破ったら許さないからね？」

「うん！ 約束だよ」

そういつて二人は小指を絡めながらお互いを見つめあう  
それはこの世界のどこかであった一つの光景

「つてきな感じの幼少期が俺もほしかったな」

「お前は馬鹿だな」

「だつてさ」男なら誰もが望む展開じゃん！可愛い幼馴染と小さい頃に結婚の約束をしてさ」そしてその後、女の子の方は約束を覚えていたけど、男の方は覚えていなくて、女の子は悲しむんだけどなんやかんや物語があつて、男が約束を思い出してハッピーエンドつてきなシチュエーション」

「妄想もそこまでいくと一級品だ」

妄想を繰り広げているこの馬鹿な友人の名前はアルト、通称アル数少ない俺の友人であり、俺の古くからの友人でもある。基本的にはいいやつなのだが、その異常なまでの女の子への執着によりみなに敬遠されている。

「なにを言うのだ！可愛い幼馴染がいる分際で！おれだつて可愛い幼馴染がほしかったさ！でもないんだ！ちよつとくらい想像でそれを補つてもいいだろう！」

熱く語るエロ男　これがなければもてるのに・・・といつも思う。

「たしかに俺には幼馴染がいるが・・・そんなにかわいいか？あいつ」

長い間一緒にいるからあんまりわからない 確かに整った顔はしていると思う

「おまえってやつぁ……世界一の幸せ者と言っても過言ではない立場にいなから、

フィーネちゃんの可愛さがわからないのか？ 透き通るようなあの青い髪、生まれたての赤子のような白い柔肌、サファイアのように綺麗な瞳！ そして誰隔てなく接してくれるあの優しい心！ 男なら誰もが恋する超美少女！ 身長156cm 体重46kg 上から78・57・76のプロポーション！ 胸はBからCと推定される 好きな食べ物は甘いお菓子 好きな飲み物は牛乳 趣味はお裁縫と料理で特技は……」

「途中からなぜ知っているのか教えてほしい情報も混じっているが、それにしても詳しすぎるだろ!？」

「ッフ！ 俺のフィーネちゃんへの愛情からしたらこの程度の情報は知っていて当然というレベルだ!」

「変態の常識を俺に語るなよ……つと、お?」

教室の入り口に目を向けると話題の人物が入ってくるところだった。俺はアルに言われたフィーネのチャームポイントをあらためて見てみる。髪の毛、肌、瞳、そして全体という順番で観察する。確かに綺麗だ

フィーネは教室に入ってくるなり、俺達を見つけると近付いてきた。

「なんのお話をしてたのかなぁ?」

「よ、フィー いやなに、アルがお前の胸はBカップだってさ」

「ええ！？ 私Cカップだよ！？」

「ちょ！？ おまあ！ なに言ってるんだよ！ そんなこと言ったら  
フィーネちゃんの中の俺の株が落ちちゃうじゃないかー！」

「安心しろ お前の株などはなから大暴落している」  
つて、フィーネはCカップなのか、

「フィー アルがお前にプロポーズしたいってさ」

「ええ！？ 本当に？ でも私好きな人がいるから………」  
めんなさい」

即座にアルを振るフィー

別に告白なんかしていないアルが「そんな……なんで？ ぼくの  
何がいけないんだ？」とか言ってるのはもはや突っ込むまい

「アルすまん 俺なりにお前の気持ちを代弁したんだが」

「代弁で求婚ってどんな嫌がらせだよ！！」

「しかしどうやらプロポーズは失敗みたいだ。 フィーは不細工が  
ほざくなだってさ」

「そんなこと一言も言っただけだよな！？ なんでそんなに俺  
の心をへし折ろうとするんだ？ おれがお前に何をした？」

そんなこんなで漫才を三人で繰り広げていると見知った二人組みが  
近付いてきた。

「お前らまた漫才やってるのか？ いつも思うがよく飽きないな？」

「あはは！ 漫才はこの三人とセットみたいなものだからね」

呆れ顔の少年と笑っている少女 ジャックとキヤリル

この二人とも結構長い付き合いだ。小さいときから良く遊んでる。前の学校でもみんなして同じクラスに在籍していた。不思議と別のクラスになったことはない

このふたりはかなりもてる。ジャックは金髪の男前、話も上手いし人との距離のとり方がうまい・・・馬鹿だが

キヤリルは赤い髪を短く切り揃え、いつも少年のような格好をしている。所謂ボーイッシュな感じの女の子だ。

「まあいいじゃんか 今年も全員そろったんだしさ」

そう 今年も俺達は全員集まった。今年から高等教育のため学校が変わったのだが、やはり全員が同じ場所に集まった

「そうだな！ 今年もよろしく頼むぞお前ら アル以外」

「なんで俺だけ!?!」

「よろしくお願いします」

「おう！ よろしくな」

「よろしくねー」

新しい学園も楽しくなりそうだな

## 変人の宝庫（後書き）

誤字脱字などの指摘まっています。できるかぎりないようにしています  
が、

感想とかも書いてくれるとうれしいです。

私は別の作品も書きましたが（完結済み）これも完結させるのでその  
辺は安心して読んでください。

結構忙しいので投稿はゆっくりかもしれないのでその辺は勘弁して  
ください

## 学園

国立魔道学院 ペネティア第一校

ペネティア共和国にある魔道学校の一つである

ここペネティア共和国には第七校まで国立の魔道学院があり、その数字は設立した順番であり、別段優秀さを示しているなどの意味はない

ペネティア魔道学院は全寮制であり、なにか事情がない限りは全員がそれに従う

教育費がとても安く、教育のレベルが高いとあって国外からの入学者も少なくない

魔法の中でも珍しい光と闇の魔術の授業があるのも人気の理由だ  
最近では卒業後に学費を払うという制度もできてますます入学者の数が増えている。

噂ではそろそろ第八校が設置されるとかなんとか

またこの学校の魅力の一つにパンが異常に美味うまいというのがある。  
食事がすべて美味しいのではなく、パンが異常に美味しいのだ。

そしてなぜ俺がこんな説明を“わざわざ”しているかという目の前の光景が理由である。

「だから！ 私にその『ふわふわもちもちトローリクリームパン』をよこさない」

「いやだね！ これは俺が先に手に入れた『ふわふわもちもちトローリクリームパン』だからな なぜ赤の他人に譲らないといけないのだ」

なぜこんな事態になったのか説明するには少し時間を遡る必要がある。

（ちよつと前）

アルのやつが

「なあ、せつかくだし今日は学校の中を探検してみないか？　せつかく早めに学校が終わったんだし、これから毎日来る学校のことはいろいろと知っておいたほうがいいだろう？」

と言い出した。

別段悪い話ではないので俺達全員でまわることになった。

「それにしても広いな。前の学校も広かったけど、ここは倍以上あるな」

「そうだね。この学校は国外からの留学生も受け入れてるし、様々な授業があるから教室もたくさん必要だからかな？」

「それにしたって多いぜ。全部まわるのはめんどくさいな」

ジャックが飽きてきたらしい。確かに俺も似たような教室ばかりでそろそろ飽きてきたところだ。キャリルは意外と楽しそうについて来てるが……そろそろ終わりにするか

「みんな、そろそろ終わりにしないか？　だいぶ回れたし、残りはいんどにしよう」

「なあ！　近くに売店があるらしいんだが、最後にそこに行って終わりにしないか？」

「売店？ アルはなんか買うものがあんのか？」

「特にないけど行ってみようぜ！」

「そうだな じゃあ最後にそこに行つて帰るか」

そしてその後俺達は売店に行つて、アルが“美味いと評判のパン”を試しに買つてみたところさっきの光景に戻るのだ

「そのパンを私に返しなさい それは私が一日一つ食べると決めている『ふわふわもちもちトローリクリームパン』なのです。あなたが買つたせいで私の分が無くなってしまったではありませんか！」

「そんなの俺には関係ないね！ このクリームパンは俺が買った。だから俺のだ！ この法は何人たりとも変えられん！」  
なにをそこまでクリームパンごときに熱くなつてんだよアル てか女の方も女の方で話がめちやくちや理不尽だ

「私が命じているのに逆らうなんて！ 私をカナディア・デ・ロ・ペルミリアンテ・スタインツホードと知つての狼藉ですか！？」

「なんだと！？ スパッツホールド！？ なんて変態な家名なんだ  
スパッツを抱きしめていたなんてストレートな言葉を使うなんて………素晴らしい」

こいつの頭はエロ関係になると突然回転が速くなるな、しかしスパツホールドはいくらなんでも勘違いしすぎだ。それにしてもスタインツホード………どっかで聞いたことがあつたと思うのだが、どこだったかな

「違います！ スパッツホールドではありません スタインツホードですわ」

「なんだ違うのか、じゃあしらねえよ 聞いたこともない」

スタインツホード……おお！ そうだ思い出した 確か……

「スタインツホードってのは西にある王国の名前だったな」

「そう！ その通りですわ！ 知っている方がいて安心しましたわ。さあわかったのですから私にそのパンをよこしなさい、そのあなた」

「は？ なんで今のであげることになるんだ？」

「聞いていなかったのですか？ 私は“王族”ですわよ？ きちんと言っことを聞きなさい」

「っは！ 俺がお前の国の国民ならいざ知らず、ペネティアにおいてお前の命令を聞く必要性を感じないね、それにマルカ そのスタインツホードってのはそんなにすげー国なのか？」  
俺に振るな

「スタインツホードは言ってみれば貧乏国家だ、目立った産業は無く、回収できる税金も少ない。もちろん悪い国というわけではない、国民の生活レベルも決して低くないしな まあのんびりしている国だ」

「なんだ貧乏国家なのか、それなのに偉そうにしゃがって」

「貧乏なのではありません！ 慎ましやかなのです！」

「っは！ 慎ましやかなのはお前の胸だろうに」

「あ・あなた！」「ほらよ！」「え？」

「いっぱい食ってその慎ましやかな胸をどうにかしろ じゃあな」  
パンをカナディアに投げて去っていくアル。 さんざん好き放題言  
って勝手に帰るなよ！ 俺達が気まずいだろうが！ 最後にはセク  
ハラ発言するし まあいつもわけのわからないところで熱くなる男  
だからしょうがないか、いつの間にかジャックとキヤリルは帰っ  
るし。俺とフィーしか残ってない。 薄情なやつらだ。

「そのあなた」

「ん？ 俺か？」

突然話しかけられた。 なんだ？ こんどは俺に対してなんか言っ  
てくるつもりか？ 勘弁しろよな・・・俺は関係ないってのに

「先ほどの方はなんとという名前なのでしょうか？」

「？ アルのことか？」

「アルというのですか？」

「ああ、今お前と口論してたやつならアルであってる。 正確には  
アルトだがな じゃあ俺達も行くから、じゃあな！」  
これ以上ここにいとアルに追いつけなくなるので急ぐ  
「アルト様……………」

ん？  
様？  
まあ  
いいか

## 学園（後書き）

誤字脱字の指摘 感想など待っています。

## 話

「おい！ アル！ どうしたんだ？」

「ん？ マルカ？ 何のことだい？」

「さっきのくだらないパンのことだよ。お前普段あんなことじゃあんなふうに関悪くなったりしないのにどうした？ なんかあったのか？」

「うん 変だったね」 普段は温厚なアル君があんなふうになるなんて珍しかった

「別になんとも無いよ？」

「嘘だな。 何があったか言え」

「何でも無いって」

「言えクソ野郎」

「扱いがひどい」

「マシな扱いしてほしいから言え。 何があった？」

「別になんとも無いって、ただね？ 試しただけだよ 後ろにいた奴を・・・ね」

「後ろにいた奴？ 誰のことだ？ フィー気づいたか？」

「ん〜ん？ 誰かいたっけ？ 気づかなかったよ」

「隠れていたんだよ、二人とも。 ずっとあのカナディアってやつ  
のこと見てたから彼女にとつてどんな人間なのかな？ って観察し  
てたんだ。 けど、あいつを罵倒すればするほどおれに対する視線  
が厳しくなつてたのから判断するに、彼女にとって悪い人間ではな  
いって判断できたからさっさと終わらせただけ」

「なるほどな〜 お前つて意外とそういったことに気づくよな 妙  
に鋭いときもあるし・・・普段馬鹿なのに」

「ね〜」

つとファイが肯定する

「二人ともさりげなく当然のようにおれを罵倒するよな？ なん  
なのそれ？ なにいじめ？」

「いじめだなんてまさか・・・俺たちの愛の形だよな？ ファイ」

「うん！ 愛の形なんだよ！ っあ！ 勿論恋愛的な意味じゃな  
いからね？」

「言われなくてもわかってるよ 一応もう一度言っておくけどさっ  
きのプロポーズなりなんなりは俺が言ったんじゃないかってマルカの奴  
の捏造だからな！」

「そんなこと最初からわかってるんだよ？」

「だったら自分の発言を俺に向かって補足するんじゃないやねえ！」

「カリカリするなよ？ アル 禿げるぞ？」

「誰の所為だよ！！」

一際大きな声が学園の廊下に響くのであった。

「で？ 紫の髪の毛が綺麗な踊り子だっけ？」

「そうなんだよ！ 今日知ったんだけどさ、この近くで毎週太陽の曜日夕方広場で踊り子がただで踊りを披露するって話なんだよ！  
んでもってそのうちの一人がとびつきり可愛いらしいんだよ！！  
！！！！ いや他の子も可愛いらしいんだけどさ 特に可愛いらしい  
これに行かずして何をして週末を過ごすのか！ いや行かずして  
過ごせん！ と思うだろ？」

「俺にどんな返事を期待しているのかはわからんけど、どうでもいいな正直、フィーは行きたい？」

「マル君が行くなら行く〜」

「マルカ！ 頼む！ 一緒に行こうぜ！ 絶対楽しいって な？」

「まあ別に、特に用事があるわけでもないしいけどさ」

「よっしゃ！ じゃあ今週の週末は踊り子を見に行くってことで決定な？」

「そんな心配しなくても約束したんだから行くさ フィーも行くんだろ？」

「うん！ 行く！」

「週末が待ち遠しいぜ〜」

「だね〜 楽しみ〜 どんなに可愛い子なんだろう！ ワクワク」

「きっとフィーネちゃんぐらい可愛い踊り子だと思うよ」

「ええ〜？ じゃあたいして可愛い女の子じゃないってことじゃ・・・」

盛り上がるアルとフィー

別段俺にとっては見慣れた光景でもあり、オカシイ点は何も無い。そう、なにもないのだ。

なのに・・・何故か俺は変な感じがした。この二人に違和感を感じているのだろうか？  
いや違う・・・なにかが起こる そんな気がした。そういえば今日の晩御飯はどうしよう？  
食材が何も無いんだった。これは困った、買いに行こう！ さて今日は何を食べようかな？

話（後書き）

がんばる

誤字脱字の指摘、感想とか待ってる

## 天授

「なあ 俺さ？ 思うんだけどさ」

「急になんだ？」

いつものように学校内で昼休みに皆と昼食を取っていると不意にア  
ルが話し始めた。

「いやね？ 俺がモテナイ理由ってなんだろう？ って真剣に考え  
てみたんだよ、そしたらさー俺ね、気づいてしまったんだよ、その理  
由にさ」

「え！ 遂にアルが自分の不細工さに気づいてしまったのか！」「  
ジャックの完璧な一言が入る。俺も言おうと思ったのに・・・や  
るなジャック

「うん！ そうそう！ 俺って鏡でよく見ると不細工なんだよねー  
って違うよ！ なんで友達に向かって平気で不細工とか言えるん  
だよ！！ いやそうじゃなくてさー おれには圧倒的に足りてない  
んだよ、そう！！ イベントという名のハプニングが！！」

「イベント？」

フィーが疑問そうに呟く

「そう！ イベントが俺には足りてないんだよフィーネちゃん 不  
良に絡まれてる女の子を助けるとか、いっしょに落とし物を探してあ  
げるとか！」  
なるほど

「つまりお前の頭の中では彼女のいる男はみなそうだったイベントが発生している？」

「そう！」

「馬鹿だね」

「一刀両断にキヤリルが切り捨てる」

「なっ！ なんだと？ この完璧な推理のどこに間違いがあるというんだ！」

「アルが魂の叫びをキヤリルに向ける。おいおい本当にそんなことがあると思っているのかこいつ？ ったく」

「なあ？ ジャック、お前が女の子をデートに誘うのに必要なものはなんだ？」

「ん？ 急になんだよマルカ？ まあいいか、そうだな、必要なのは女の子と話す時間かな？ 10分ありや次の日デートぐらいできる。」

「らしいよ？ アル、お前がモテナイ理由は他にあるらしいからとりあえずイベントはおいておけ」

「わかったよ……」

「お？ 意外と今日は物分りがいいな……」

「つまり……俺がモテナイ理由はジャック！ テメーみてーなイケメンがいるからだ！！」

「バツッとジャックに襲い掛かるアル 瞬間的によけるジャックも」

のすごい攻防だ

「避けるな！！ ジャック！」

「無茶言つな！　なんで俺がお前の逆恨みを受けなくちゃならん」

「逆恨みではない！　イケメンは死すべし！　イケメンは人類の敵！　イケメンは……俺の敵だあ！！！！！！！！」

「それが逆恨みだつて言つてんだよ！！」

アルの高速パンチをすべて受け流すジャック、流石に近接戦闘ではジャックに分がある

「おっと！　あぶねえあぶねえ　そろそろこっちからも行くぜ？」

「こい！　人類の敵！　あとできれば恋も来い！」  
馬鹿だ……

「ッフ　ッセイ！」  
ジャックの繰り出した拳打がアルの腹部を捕らえ吹き飛ばす。そしてそのままいすに座ってお弁当を食べていたキャリルにぶつかるが、幸いそれほど勢いでもなかったため怪我はしていない……  
・が

「すまんキャリル」  
ぶつかったことを素直に謝ってジャックに向き直るアル。しかしそのとき左足に違和感を感じた。何かを踏んでしまったようだ。足を上げてみるとどうやら肉質なものを踏んでしまったようだ。靴からそれを剥がすため床にこすりつける。

ガシツツという擬音が聞こえるかのようにアルの頭がつかまれる。一体誰が？　と思ひ振り向こうとしたが頭がピクリとも動かない、

そしてそんなことができる人間に行き着く。

「あの〜つかぬことをお聞きしますが・・・俺の頭を掴んでいるのはキヤリルさんでは？」

丁寧な口調で、それも恐る恐る聞いてみる。

「そうだよ」

無機質な声で答えるキヤリル。怒りという感情は激怒よりも静寂のほうで俺は怖いと思う

「え〜と・・・なぜ私の頭を掴んでおられるのでしょうか？」すでに一人称が変わっているアル。ようやく事態の深刻さに気づいたようだ

「アルが自分の記憶を5分間ほど遡ってその間に起こった現象をすべて論理だてていけば答えは見つかると思うよ？」

冷静に・・・しかしして怒りを含ませてながら優しい声で質問に答えるキヤリル まじで怖いです。

「え〜と キヤリルにぶつかって・・・謝って、ジャックとまたやるうとしたら何かを踏んづけていて、見てみるとなにか肉のようなもので・・・」

「そうだね、私のお弁当の、私が今まさに食べようとしていた、箸でつかんでいた、私の大好物の、あなたがぶつかったことによって落下した私の・・・肉よね」

「え〜と・・・キヤリル？ とりあえず落ち着こう？ 話せばわかるというのが人間の美德だと思うんだ俺」

必死にキヤリルをなだめようとするアル、確か以前にもあったなこ

んなことが、キャリルは自分のものが奪われるのが何より嫌いな奴だからな・・当然か

「あきらめるアル、こうなったら手遅れだ」

さも自分は関係ないかのように言うジャック、どうやらアルを生贄に捧げることにしたようだ。

「ふふふ なにを言っているのジャック？ あなたも同罪よ？」

「な！！ なんで俺まで？」

「確かに直接的にはアルの所為だけど、間接的にはあなたの所為でもあるんだからね？」  
まあ確かにな

「二人とも覚悟はいい？ 行くわよ？ おいで！ ガミアン！！」  
名前を呼ぶやいなやキャリルの手に光とともに現れるガントレット、格闘タイプのキャリルにふさわしい武器だが・・・

「ちよつとまで、お前！ 天授<sup>てんじゆ</sup>まで使うのか？」

「あつたりまえじゃない！ 徹底的にぼこぼこにしてやるんだから！ 大丈夫だよ？ 殺しはしないから」

「「当たり前だ！！！！」」

二人の男の悲しき叫びが教室に木霊した。

顔がはれ上がった二人の男を前に満面の笑みを浮かべるキャリルちよつとばかりやりすぎな気もするがここで下手に言い過ぎて不機嫌になられたら困るのでちよつとばかり注意だけしておくことにした。

「いくらなんでもアホの制裁に天授てんじゅを使うのはやりすぎだと思うぞキャリル？」

「大丈夫だって、むしろこの二人最近どんどん頑丈になってきてるしこれぐらいしなきゃおしおきにもならないよ」

「だからって天から授かった崇高な武器を馬鹿の制裁に使うのは・・・まあこいつらだから良いか？」

「よくないわ!!」「」  
見事に息のそろった非難が俺に向けられた。

『天授・・・それはこの世界の住人なら誰でも持っている神から与えられし神聖な道具

人間にとって役に立つ道具である。そのほとんどは武器であるが、たまに武器以外を授かるものもある。モンスターがはびこるこの世界にとって天授はなくてはならないものなのだ。キャリルはガントレットタイプの天授、名前をガミアンという。そしてジャックはラ

ンサーであり、アルはガンナーだ。天授はそれぞれに適した形となつてあらわれる。またその人間の必要度に対して進化もするのだ。そうだ・・・俺はしてないのでわからないが』

「まったくヒデー目にあつたぜ」

愚痴をこぼしながらも戯れていたことを反省するジャック、少しは懲りたようだ

「本当だよな〜 くだんはちゃらんちゃらんしてるキャリルだけど、怒るとあれだもんな〜まあ怒った後はいつもどおりになるから構わないんだけどさ」

そついつと腫れた頬を撫でるアル、じつに痛そうだが原因が馬鹿なだけに同情ができない。

「それにしても、これでアルはますます女の子にもてなくなったな。ただでさえもてないのに顔が腫れるなんて悪いところだらけだな」  
笑いながらもアルを茶化すジャック、本当にこいつ懲りているんだろつか？

「ふんだ それを言うならジャックもこれで女子が寄り付かなくなつたね？ 自慢の顔が傷ついたんじゃ他に取り得が無いしね」  
ジャックにしたり顔で言い返すアル、お前はわかつてない

「何を言うかと思えばまったく駄目だなアルは、イケメンは顔が腫れても腫れが引いたらイケメンに戻る。不細工は腫れが引いても不

細工のまま、よって女の子はイケメンの顔が傷ついていたら心配こそすれその逆はありえないんだよ」

「な？ なんだって？ やっぱり僕はお前を殺す必要があるみたいだ」

「お？ やるか？ いいだろう、かかって来い！ 顔の違いを見せてやる！」

格の違いだろジャック……まあ、あながち間違っちゃいないけどよ

「後悔しても知らないぜ？ 行くぜ！」

「おう！」

「やめる馬鹿二人」

馬鹿二人の頭に拳骨を一発入れる

まったく、こいつらは鶏より記憶力が無いのかもしれない

いったいなんど同じことを繰り返せば気が済むんだか、

## 天授（後書き）

ひさしぶり

なんか今回更新遅くてスマン又

いろいろと忙しいのよ、なんてね

いつも言ってるけど完結はするので気長にみてください

しばらく更新しなかったり、いつきにたくさん更新したりと不定期  
です

誤字脱字、感想などお持ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5128m/>

---

嫌いな俺と大好きな彼女

2010年10月21日07時04分発行